

「君が代」考 ー国民に最も親しまれた歌ー

(遺稿) 石橋雅義先生*

「君が代」は旋律が原始的であり幼稚だという批評がある。しかし日本国民に最も親しまれた歌である。“国民相互の長寿を祝福し敬愛する”歌であるという京大名誉教授・石橋雅義博士に、その由来から考察まで、いろいろと聞いてみた。

フェントン (英軍楽隊) のすすめで / 大山元帥 古今和歌集からとる / 日本人の作曲募集 明治13年 / 天長節に初の公式演奏

ー洋式の奏楽に感激してー

まず国歌「君が代」の成立した由来だが、明治元年10月明治天皇が東京に行幸のさいに途中、神奈川を通過された。このとき横浜滞在中の英、仏の両軍隊は日本にいまだ国歌がなかったので、やむなく英軍隊は英国の国歌「ゴッド・セーブ・ザ・キング」を演奏して鳳輦を歓迎したそうである。

このとき鳳輦を守護していた軍兵の中心は薩摩兵であったが、かれらは洋式の奏楽に感激した。英の軍楽隊長フェントンのすすめによって、日本国歌制定の要請を東京の総帥西郷隆盛にしようとして使者に顛川宗之進が選ばれたが、折りあしく西郷さんは東北地方の平定のため出陣中であつたので、顛川は代理役として在京中の砲兵隊長大山巖 (のちの元帥) に願い出た。

そのとき野津鎮雄 (のちの元帥) も同席しており、大山さんと野津さんはフェントンの意見に共鳴された。そこで大山さんは古今和歌集 (905年) 第七卷冒頭に載っている題しらず、よみ人

しらずの賀歌「我君はちよにやちよにさざれいしの巖と成りて苔のむすまで」…なお後年の和漢朗詠集 (1013年) には初句だけが「君が代」と改められているのだが、大山さんは「君が代」の歌詞を選び、作曲をすべてフェントンに依頼した。この作曲は明治3年にできたが、日本人にアピールするにはいたらなかった。明治4年、日本に軍制がしかれたときに、初代の陸軍軍楽長になった四元義豊も、海軍軍楽長になった中村祐庸もともに薩摩青年であつて、明治初期の和・洋音楽の開発と進歩に著しい業績を残された。さきの顛川青年やこれらの二人ばかりでなく、かねてから薩摩ビワに親しんで音楽の耳を持っていた約三十人ほどの薩摩青年たちは、当時新たにフェントンに師事して洋楽を学んだ。その後、数次にわたる国内の変事を経て明治12年には日本の政情も安定したことと、また宮内省楽部には和・洋両楽にたん能な青年たちがすくなく成長していたので、政府の要請で宮内省は英断をふるって

*本財団初代理事長

日本人による作曲をひろく募集した。

－軍楽隊の楽器編成がえ－

明治13年秋に優秀な若い奥好義、辻則承、上真行の三人が応募した。今日のことばでいえば林広守を委員長とする選考委員会で慎重に審議の結果、奥好義の作曲が第一位に選ばれ、それにほんのわずかながら林さんの手が加えられたとの話がある。しかし責任者の林広守選曲として公表されて後年まで奥好義の名が伏せられたために林広守作曲と誤り伝えられるようになった。奥さんの作曲の旋律をそのままにして、宮内省の委嘱により洋楽器で洋風に演奏するように楽器編成がえをしたのが当時、海軍軍楽隊の外人傭教師であったドイツ人のエッケルトである。明治13年11月3日の天長節（今の文化の日）に宮中（今の皇居）で演奏されたのが公式演奏の最初である。

－26年8月に国歌として発令－

その後、日本の陸軍海軍軍楽隊はこれを国歌として用い、外務省からは海外に国歌として発表されている。しかし文部省が奥好義作曲、林広守選曲の「君が代」を正式に国歌として発令したのはかなりおそく、明治26年8月12日で官報号外をもって公表された。

－真の作者は女性ではないか－

ところで「君が代」の歌詞にたいする批判についてだが、「君が代」は題しらず、よみ人しらず、である。それは作者の地位が低く、無名の庶民を意味している。大君の文字はどこにも使わ

れていない。わが君とは自分の仕えている主君や、主人を意味したものと思われる。あるいは自分の夫か、恋人？を意味したかも知れない。

この作者は女性であったのではなからうか、と歌にはまったくのしろうとの私には思われるのだが…。

また和漢朗詠集には「君が代」と改められているが、すべて「君」とは相手を尊敬していった日常の敬語である。朗詠は当時、中流以上の人士のよく愛唱した歌謡曲である。「代」は齢を意味する。すなわち「君が代」の原意味は「あなたはいつまでも幸福に、長生きなさいませ」ということであって、国民相互の長寿と敬愛の意を述べたものであろう。これが国歌に制定されたので天皇至上主義に、天皇のみをたたえたものと解釈されるようになったものと思われる。

明治維新という未曾有の大変動、大革命後の当時の国情のもとでは、ある例外を除いて一般にそのように思われたのも無理からぬことであらう。

「君が代」の旋律が原始的で幼稚だという批評もあるようだが、第一次世界大戦（1914～18年）後の大正時代にドイツ国で最高の音楽家たちが集まって、世界中の国歌について検討したことがあったさいに、日本の国歌「君が代」が最高であるという折り紙がつけられている。

－非科学的の批判は当たらぬ－

つぎに「君が代」の終わりの語句が非科学的であるという批評、つまり

「さざれ石が巖となりて…」についてである。岩がくだけでさざれ石になることはあっても、その逆作用はありえないから非科学的で教育上有害だ、という非難だが、これは誤解である。私は海洋学の立場から逆作用は現実に起こることを事実を以て立論したい。それは私のかねてからの持論でもある。現代の地学の教えるところによると岩石には火成岩、堆積岩、変成岩がある。その一つ堆積岩の中にも淤泥や砂粒が風送され、堆積の結果できた風成岩や淤泥や砂粒が湖底や海底に長年堆積した結果できる水成岩がある。私の考え方では「君が代」のなかの、さざれ石からできた巖は水成岩であり、とくに主として海洋水成岩にほかならないのではないか、というのである。私の研究では海洋の年齢は32億4千万年に及ぶという巨大な数字が得られている。長い年月の間に集まり、たまり、つもった淤泥や砂粒や礫などの海底沈積物質層はその無限ともいえるほどの大きな圧力化のもとに多分、発熱現象を伴いながら、もろもろの微妙な反応機作のもとに、海洋水成岩の生成するであろうことを科学的に推断せざるを得ない。

つまりこれは海底でさざれ石が巖に化する作用にほかならない。地球は生きているのである。スイスのアルプス連峰はすべて太古、海底でできた水成岩であり、日本アルプスの峰々は火成岩や水成岩や変成岩の混在態であることが立証されている。水成岩が地上の

ものになってから風雨にさらされ、いつか植物孢子の宿るところとなり、やがて当然、苔むす状態になることだろう。

その昔、この無名の作者が地学を心得ておられたとは、まったく想像できない。しかし作者の深い深い歌心と、天来のインスピレーションとの合作の結果、このような大傑作が生まれたものと思われる。

要するに私はこの無名の作者の靈感、直感の偉大さに頭がさがるのみである。約千年のむかしに日本の無名の一庶民が賀歌「君が代」をつくった。それは人間世界の相互の敬愛、友情、幸福、長寿をことほぎ願ひ合う意味であった。加えて現代科学の立場からも広大無辺な真理が蔵されている。

このような、りっぱな国歌に比すべき他の国歌の存在を、日本以外のどこにも求めることができない。

われわれは適切な記念の機会にその原意義を理解して、日本国のシンボル天皇をはじめ同胞相互への、先にいった心をこめてひろびろとした心で「君が代」を斉唱したいものである。

あとがき (藤永)

昭和46年「夕刊京都」所載のものではあるが、国歌については現在も議論されているところでもあり先生の本稿は史実、資料としても重要で再録に値するとおもわれた。特に「海洋水成岩」説を強調されている点、本誌論説としてふさわしい。